

少人数教育の「教育効果」とカリキュラム開発に関する研究(2)

A Study of Educational Effect by Development of Curriculum for Small Size Classroom (2)

川本 治雄
KAWAMOTO Haruo
(教育学部)

居澤 結美
IZAWA Yumi
(附属小学校)

(抄録)

本研究は、2008年度の和歌山大学教育学部附属小学校の少人数学級における教育効果に関する継続的研究の第2報である。昨年度「和みカリキュラム」として少人数学級に対応するカリキュラム開発を行い、教育効果について検討した。本年度は、改訂された「和みカリキュラム2009」の実施を通して、1、2年生の生活科で継続的に実施していく上での教育効果についての再検討を行った。附属小学校としてのカリキュラムを策定することによって、保護者ボランティア（「和みたい」）の教育力をカリキュラムの中で引き出すことによって教育効果を上げることのできる実践研究として、他のカリキュラム開発への糸口が開かれた。

(キーワード) 少人数学級、教育効果、カリキュラム開発、和みカリキュラム

はじめに

2008年度の実践を、和歌山大学教育学部附属実践センター紀要No.19に「少人数教育の「教育効果」とカリキュラム開発に関する研究(1)」(松浦善満・梅本優子・西村充司)としてまとめている。2008年度のこの論文においては次のような構成である。

はじめに
1. 本研究の目的
2. 少人数教育とカリキュラム開発
3. 「和みカリキュラム」実践の概要
4. 少人数教育の効果について
5. 外部評価による検証
おわりに

「1」の研究の目的において、次の4点を上げている。①少人数教育(学級)において、児童の教育効果が高まるのか、また、その学習効果の内実を明らかにする。②少人数教育(学級)において、指導者は学級サイズに対応した指導内容・方法をどのように発展できるのかその可能性と、カリキュラム開発の内実を、生活科の実践を中心に明らかにする。③少人数教育(学級)における保護者の学習参画(ボランティア)の可能性と効果を明らかにする。④少人数教育(学級)における保護者・地域の学校・学級評価に、どのような変化が見られるのかを明らかにする、の4点である。

特に②のカリキュラム開発に焦点を当て、「教育効

果」を中心にまとめたものである。

2008年度の研究仮説¹⁾で述べられているように学級サイズと学習効果の関係は、同一カリキュラムを実施した場合に、一般的な「順位相関」として学習効果が必ずしも現れるのではなく、学級サイズに対応したカリキュラム編成に規定されて、独自性が存在する。それは、子どもの学習意欲を引き出し、学習を進める学級担任の資質に大きく関わっている。具体的には、同一カリキュラムにしたがって授業を展開する場合において、学習内容の把握や目標の設定、学習内容に見合う「教材」の選定や「教材」の開発、さらには学習方法などにも関係する学習環境などを準備し、学習展開を図ることなど、学級サイズとは独立した要因による側面も考えなければならない。

しかし、これらの諸要因は、逆に、学級サイズによって規定されることも当然のこととしてある。

そこで本研究の授業実践では、2008年度(平成20年度)開発された「和みカリキュラム」の実践を通じて開発されたカリキュラムをどのように見直し、教育効果を検証し、全校のカリキュラムの中に位置づけ発展させていくのかという道筋を明らかにしたい。

1. 研究の目的

1. 1. 研究の目的

本研究は、新しい学習指導要領の改訂の趣旨をふまえ、実践を通してその効果をさらに高めるために、2008年度に明らかになった「和みカリキュラム」の教育効

果を引き継ぎ、その改訂を行い、実践を重ねることによって全校カリキュラムの中にどのように位置づけていくのかという検討を通して、カリキュラム開発ならびに教育効果の検証を目的として行う。

1. 2. 研究の重点

「少人数教育（学級）において、指導者は学級サイズに対応した指導内容・方法をどのように発展できるのかその可能性と、カリキュラム開発の内実を、生活科の実践を中心に明らかにする。」ことを本年度の重点として取り組む。具体的には、生活科主任が各教科主任や学年主任などの校内関係職員と連携しながら、2008年度のカリキュラムをもとに、改訂カリキュラムを作成し、いくつかのプログラムでの授業者の技能や知識に応じて、経験や専門性を有する保護者（和みボランティア）と共にすすめ、校内では、チームティーチングによる授業展開を基本として実施した。

これは、個別担任のひとりの力量では、なし得ない単元開発の可能性をもつものである。また、同じ指導案による（同じ指導方法）担任ひとりひとりの経験や専門性の違いを高めていく保護者の教育力を生かす分野の単元開発にも生かすことのできる可能性を探ることもできる。

このように、少人数教育（学級）における学習効果は、同じ条件での40人学級における学習効果と比べることは困難であることから、実践的な取り組みを中心とした本研究では、少人数教育（学級）において、指導者は学級サイズに対応した指導内容・方法をどのように発展させることができるのか、その可能性と、カリキュラム開発の内実を、生活科の実践を中心に明らかにする。30人学級（少人数）における実態をできる限り明らかにし、カリキュラム開発の妥当性という点から考察することを2009年度の実践の重点とする。2008年度のカリキュラム開発での生活科における「和みカリキュラム」の改訂を中心に見ていくことにする。

さて、2008年度の「和みカリキュラム」は、2年生においては、2007年度の1年生の時点では30人学級で「生活科」として実施し、2年生で初めての「和みカリキュラム」での実施学年である。30人学級での2年間を通しての本格的な「和みカリキュラム」に基づいたトータルとしての実施は、2009年度が最初ということになる。このようなスタート時点での課題がどこにあるのか、1年での実施を受けて、子どもの育ちとカリキュラムの整合性についても検証しなければならない課題である。

1. 3. 「和みカリキュラム」設定の理由と目標

生活科において、4つのプログラムを設定し、「和みカリキュラム」として1年生、2年生で実施する基本的な考え方は以下の通りである。

1. 3. 1. 設定の理由

生活科の目標を達成するため、昨年度から30人とい

う学級サイズにあった「和みカリキュラム」を開発し、改訂を行いながらその効果を検証している。

「和みカリキュラム」の設定の理由は次の5点である。

- ①体験・活動を通して、よき「日本の生活（衣食住）習慣」「日本の季節感」を取り入れるとともに、「初歩的な礼儀・作法」を身につけ、「好ましい人間関係」を構築することができる。
- ②体験・活動を通して、異文化と触れることにより、見聞・見識を広める。
- ③日本文化・異文化交流を同時に進めることにより、それぞれの特性、類似点・相違点を理解することができる。
- ④希薄になりがちな人間関係（家族・友だち・地域社会）の営みを、自ら進んで築いていこうとする意欲・態度を、学校教育の中でも養う必要性を感じる。
- ⑤図画工作科、国語科・道徳・食育教育等との関連を積極的に図り、指導の効果を高める。生活科を中心とした合科的な指導を行う。

このような「和みカリキュラム」の設定理由のうえに、次の二つの目標を設定している。

1. 3. 2. 目標

第一点目の目標は、「具体的な活動や体験をとおり、自分と身近な人々・社会および自然との関わりを深め、自分のよさや可能性に気づき、意欲と自信を持って生活することができるようにする」ことである。第二点目の目標は、「生活上必要な習慣や技能を身につけさせ、自立への基礎を養う」ことである。

1. 3. 3. 内容

身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わる活動を行ったりなどして、四季の変化や季節によって生活の様子が変わることにより気づき、自分たちの生活を工夫したり、楽しくしたりする。また、自分たちの生活や地域のできごとを身近な人々と伝え合う活動を行い、身近な人々との関わることの楽しさが分かり、進んで交流することができるようにするという二つの中心的な内容の上に構成されている。

2. 少人数教育と2009改訂「和みカリキュラム」

ー「和みカリキュラム」の4つのプログラムー

2. 1. 「和みカリキュラム」とコミュニケーション能力育成

「和みカリキュラム」は、少人数教育における従来にはないすぐれたカリキュラムと教育方法を生み出す中で、子どもたちのコミュニケーション能力の育ちと学級人数の関係性に着目して開発したものである。特に入学した1年生の子どもが、心地よく周囲の人と関わることは、その後の小学校生活のみならず、全生涯を通じての基盤をつくる機会ともなる。

教科の中でのコミュニケーションや言語能力の育成

が強調されている中で、教科教育の本質的な内容を獲得するプロセスにおける課題としてアプローチしながら、より効果的にコミュニケーション能力を育成していくという位置づけが、この「和みカリキュラム」にはある。つまり、「和みカリキュラム」を構成しているそれぞれのプログラムを進める過程においてコミュニケーション能力の育成が図られるのである。この時どのような教育内容によって、どのような時に子どもたちのコミュニケーションが成立したのかということがその具体的な検討事項となる。

2. 1. 1. 心地よく人と関わる体験プログラム

2009改訂版には1年生4月に「気持ちいい！ごあいさつ・マナー」があり2年生の5月には、「気持ちいい！ごあいさつ・マナー 上級編」がある。また6月には「和室で“和み”その1（立ち振る舞い）」〈1年〉、「和食のマナー パート1」〈2年〉があり、2年の和食のマナーのパート2は2月に計画されている。

このプログラムにおいては、人間関係を構築していく上で、自分の気持ちをどのように表現するかというスキルを身につける機会が今までの日常生活の上で少なくなっている現状もふまえ、あいさつの仕方や、所作、学校のいろいろな場所での声の大きさ、いすの座り方、和室での座り方など生活上の基礎基本のマナーやルールなどを扱っている。

心地よく人と関わる大切さは強調しても、そのことに対してどのような取り組みをするのかということプログラムの中に位置づけて進めていくことに大きな意義がある。

このことが、一人ひとりの子どもの特性や性格が違って、人間関係を構築する共通の土台を養うことになると同時に、同じことに取り組む中で仲間としての連帯感や取り組みを同じくする中での共通性を認めていくことにつながると考えられる。

2. 1. 2. 自然の変化を感じ、表現するプログラム

このプログラムは、1年2年の発展的プログラムで、その完成や成長の違いを目の当たりにすることのできるプログラムである。2年生の子どもたちもまた1年前の取り組みとの違いを意識し自らの成長に気づかせることのできる取り組みとなる。

1年生の5月には、「身近にある春のお花をかざろう」、2年生は「身近にある春のお花をかざろう 見え方」と取り組みの内容が高度になる。また1年生は6月には、「和室で“和み”その2（お花飾り）」と続き、9月から10月にかけては、1年生は「お花をかざろうはいくをそえよう」、2年生は「お花をかざろうはいくをそえよう（季語）」という取り組みで、言語活動と結びつけながら、生け花と共に、言語での表現を取り入れ、春に体験した活動を振り返り季節感を感じながらの授業展開となる。

3学期にはいると1月に1年生も2年生も「冬のお花かざりを楽しもう」という活動になる。年間を通し

て、取り組んできた経過を生かして、季節の花に着目して生けることを「楽しむ」という姿勢を大事にした体験活動である。

こうした活動が、効果的にできるのも、豊かな自然環境に恵まれているからであり、校舎周辺に咲く草花や雑草の変化に注目して生活を送ることのできる子どもを育てることにつながっていく。こうした活動を通して、自然の変化に敏感になり、感じたこと考えたことを表現し相手に伝えていく活動や人間的な豊かさを育むことにつながっていく。

2. 1. 3. ものづくり体験プログラム

2年生の6・7月は「千代紙をつかって（七夕かざり）」と「和小物をつかって（ふろしき編）」、12月には1・2年生での「祝いはしぶくろづくり」「はしおきづくり」などの活動がある。

これらはいずれも自ら働きかけて、対象を変化させるという「ものづくり」に通じる活動である。現在の子どものみならずおとなの日常生活も、生産的な活動から切り離されているのが現状である。消費生活にどっぷりつかっていると表現できるが、子どもたちが生き生きと活動する場面の一つが、対象に働きかけ、その対象を変化させた時である。小さなことであっても自分で作る、自分でできる体験を重ねることは、自ら考え工夫し、考えたことを表現することによって、そのできばえを相手に伝えることは、重要な教育活動の一つである。

2. 1. 4. おもてなしの心を育てるプログラム

このプログラムは、3月の「お茶会をひらこう」という最終の活動に集約されるが、年間を通した取り組みに支えられている。

1年生の6月に「お茶のいただき方」（和室で“和み”シリーズのその3）、9月の「麦茶の入れ方」10月の「日本茶」等の取り組みは、日常生活の見直しを意図している。ペットボトルによるお茶が日常化している今だからこそ、お茶に着目して生活を見つめ直してみるという視点を大切にしたい。具体的には、お茶の「におい」に着目し、「においをかぐ体験」を取り入るなど五感にも訴え、自らの感性でつかんだ感想を交流するなど、より豊かなとらえ方ができるような活動を取り入れている。

その上で、秋には、1年生の「和歌山城のお茶室デビュー」、2年生の「和歌山城のお茶室へ行こう」が、子どもたちにとって印象的な体験活動になる。

3学期では1年生は「お茶の立て方」「お茶の出し方」、2年生では「お茶の立て方 上級編」と続いて、お茶会の開催につながっていくプログラムである。このプログラムの目的は、「おもてなしの心」を育てることであって、茶道の基本を押さえることではない。

1学期から計画的に実践されてきたお茶に関わる体験を通して、日本の伝統文化である茶道に触れることは、初めての経験である。このような伝統文化に、子

＜資料１＞ 2009年「和みカリキュラム」和み年間計画 活動内容

2009年度 和み年間計画 活動内容(活動内容・日時には変更があります。)	第1学年	第2学年
4月21日(火)		
4月28日(火)	①気持ちいい!ごあいさつ・マナー	
5月12日(火)		①気持ちいい!ごあいさつ・マナー 上級編
5月19日(火)	②身近にある春のお花をかざろう	
5月26日(火)		②身近にある春のお花をかざろう 見え方
6月2日(火)	③和室で“和み”その1(立ち振る舞い)	
6月9日(火)		③和食のマナー パート1(配膳・御箸)
6月16日(火)	④和室で“和み”その2(お花飾り)	
6月23日(火)		④和食のマナー パート2(御箸のマナー)
6月30日(火)	⑤和室で“和み”その3(お茶のいただき方)	
7月7日(火)		⑤お茶をたてよう(鉄器をつかって)
9月15日(火)	⑥麦茶の入れ方	
9月29日(火)		⑥お花かざろう はいくをそえよう(季語)
10月6日(火)	⑦日本茶	
10月13日(火)		⑦⑧和歌山城のお茶室へ行こう!
10月20日(火)	*本研究会前なのでカット	
10月27日(火)		*本研究会前なのでカット
11月10日(火)	⑧⑨和歌山城のお茶室デビュー	
11月17日(火)		和歌山城のお茶室へ行こう!
11月24日(火)	和歌山城のお茶室デビュー	
12月1日(火)		⑨風呂敷を使って(おべんとうの包み方)
12月8日(火)	⑩はしぶくろ作り	
12月15日(火)		⑩はしぶくろ作り(紋切など入れて)
1月19日(火)	⑪冬のお花かざりを楽しもう	
1月26日(火)		⑪冬のお花かざりを楽しもう
2月2日(火)	⑫お茶の立て方 その1	
2月9日(火)		⑫和食のマナー パート2
2月16日(火)	⑬お茶の出し方 その2	
2月23日(火)		⑬お茶の立て方 上級編
3月2日(火)	⑭お茶会をひらこう	
3月9日(火)		⑭お茶会をひらこう
	⑭は、学級によって曜日を設定していただくこともできます。	
行事等を省き、設定していますが、内容・日程は変更することがあります。また学級の実情に合わせてください。あくまでも、上記の日程は予定です。また行事の都合上、A・B週がすべて整合していません。1・2年とも同じ回数とするためです。ご了承ください。		

どもたちを会わせ、子どもに興味と関心を抱かせることは、この時期の子どもにとって精神的な意味でも重要な働きかけとなる。

畳の上での歩き方、履き物の揃え方、正座、お菓子やお茶のいただき方など「作法」としての体験を通した取り組みを大切にしたい。

相手のことを考えることが基盤になってそれが、「私たち」となったものを体験することによって「おもてなしの心」が相手を気遣い相手を思いやるという学校生活での基本になることを知ることは意義のあることだといえる。

3. 本実践で明らかになった教育効果

3. 1. 「和みカリキュラム」実践の効果

まず、2008年度の1年目の成果を上げると次の4点を上げることができる。

第1に、「和みカリキュラム」を軸とし、そこから広げることができ、子どもたちの活動が充実していったことである。第2に、たくさんの人と関わることができ、ねらいとしてのコミュニケーションが図られたこと、第3に、「子どもたちが落ち着いた」「家でもお茶を立てるようになった」「これからも続けてほしい」等の保護者の方々の反応もよかったことである。最後に、公立校のような小さな校区単位の地域を持たない子ど

もたちにとって、活動の「共通項」ができたことが上げられる。

次に、2009年度の2年目の実践を通して、次の5点が成果として確認できる。

まず第1点は、2年生の子どもたちは、昨年度実践しているので、「共通項」があり、とても意欲的に活動に取り組んだ。第2に、保護者ボランティアの方々とより綿密な連携を図れるようになってきた。第3に、2年生は、「相手も自分も心地よい」という意識が高まり、マナーを覚えたりしなければならぬという思いに縛られたりせずに活動ができていた。第4に、カリキュラムの本格実施2年目ということで、昨年度を生かして、内容を精選したり充実させたりしながら2009年度改訂版にしたがって実施することができた。第5点目は、保護者の方からの反応もよく、子どもの育っている姿が、保護者にも実感できている面があることである。

2009年度の実践の中での課題は、主に3つが上げられる。第1に、評価の件である。担任がどのような視点で子どもの変化を「みとる」かである。子どもの「気付き」のレベルで、子どもに即して丁寧に「みとり」、一人ひとりを評価しなければならないが、総括的な評価にならざるを得なかった。第2に、カリキュラム構成についてである。2年目の「和みカリキュラム」ということで、昨年度1年生だった2年生は、内容を少し変えて計画を練った。しかし、昨年度の内容にレベルアップした分を付け足しての実施ということで、子どもたちにとっては、「昨年度と似てるやん」という声が挙がっていた。これは、カリキュラムの実施がスムーズに進むという利点もあるが、マンネリ化を招くことになる。2010年度の改訂にあたって配慮しなければならない点である。

第3は、このカリキュラムを継続していくという学校全体としてのシステムづくりである。担任が中心となっていく方向にシフトするのか、現在のT、T体制と保護者ボランティアの組織的な運営を定着させるのかという選択肢があるが、成果と課題を検証しながらカリキュラムとしての中期的な展望を持たなければならない。また、1、2年のカリキュラムとしての策定をしながら、プログラムの実施にあたっては、プロジェクト的な子どもの実態に対応できるような柔軟な姿勢が求められている。現在のカリキュラムの実施においてはT、Tと保護者ボランティア「和みたい」の存在が実施のための条件となっている。

3. 1. 1. 子どもの評価

個別学級(2年C組)における具体的な子どもの評価について検討してみたい。

C組では、1年間の活動を通して、その年を振り返っていちばん印象に残った活動を文集の形式でまとめている。(2年C組『笑顔』2010年3月発行)この3学期の最後の文集『笑顔』において、生活科の学習内容を中心に取り上げて書いている子どもが、10名いる。1

年間を振り返って印象的であったできごとが取り上げられることになるわけで、30名中10名が印象的な活動として取り上げているというのは、授業内容との関連で言えば突出している。

主として生活科について書いている主な題名だけを上げると、「おせわになった人へのお茶会」「竹とう夜」「楽しい生活のじゅぎょう」「お茶会」(同題名2人)「竹とうや」「和みのお茶会」「竹とうや2Cさんか」「お茶会」「2Cの思い出」(竹とうや)となり、海遊館への遠足やスポレク、附属っ子フェスティバルなどの行事的な活動を凌ぐ印象深さである。

また、体験を通して綴る中での表現の豊かさを獲得していくという側面も「みとる」ことができる。一例を挙げると次のような「お茶会」での事例がある。

「(前略)しばらくしておきゃくさんが来たので、足をちゃんと直しました。すると、また足がいたくなってきました。足の中でセミが鳴いているような感じで気もちわるかったです。(後略)」といった表現に見られるように、体験なくして獲得できないような内容が子どもの豊かな感性によってとらえられ表現されている。

3. 1. 2. 和みカリキュラムの発展(竹とうやのオブジェづくり)

和歌山市主催の竹燈夜というイベントに参加し、フラワーオブジェをクラスで作ることになった。これは、生活科でおこなっている「和みカリキュラム」での「秋のお花かざり」の発展という位置づけである。お花飾りの時間に「もっと多くの人に自分たちの作品を見てもらいたい」という子どもたちの願いから始まった。その願いに向かって子どもたちは、イメージ図を書き材料や必要なものを考え、自分たちの手で作りあげていった。30人のイメージは、大きく4つにわけられ、その数のグループ活動をはじめた。

各グループとも「見る人にいいなあと思ってもらいたい」という課題を持ち、さまざまな工夫をしていた。中心の竹をまっすぐに立てるために花器に新聞紙を入れて固定させたが、見栄えがよくないのでグループのメンバーで考え合っていた。

子どもの会話は次のように進んだ。

「大丈夫やで、遠くから見たらわからんし。夜やし。」
「すてきやから近くで見たいって思うかもしれんやん」
「なんか隠そうよ見えている新聞紙に色塗るの。」
「けど、ちょっときれいじゃないかも。」
「あっ、蔓からとった葉っぱのせたら！」
「いいね、めっちゃきれいかも。やったー。」
というように喜んで作品を仕上げていった。

このように、子どもたちは、自分たちが生み出した課題を通して話し合いを進めていくことができた。子どもたちは、課題に対して積極的に取り組むことができた。グループ活動でそれぞれが意見を出し合い、互いに関わり合いながら作業を進めていた。課題に向かう中で、具体物を比べたり、試したりしながら真剣に

考え合っていた。対話をより深めるには、子どもたちが対話によって変化している対象物を見えるようにすることが大切である。言葉だけのやりとりでなく、対話によってアクションをおこしその経過がメンバー相互に評価されながら、次の新しい考えを提起していくということによって子どもたちの対話が深められるのではないかと考えている。²⁾

3. 1. 3. 「アサーションの対話」をめざして

課題に向かう対話のなかで学習は深まっていく。しかし、その対話には「アサーション」が必要なのではないか。「アサーション」とは、「心地よい関係」という意味を持った言葉である。「心地よい関係」とは、何でも自分の思い通りになる、好き放題できるというものではない。ひとりが心地よいだけでは「関係」にはならない。一つの物事に対して、誰もが納得する、または納得できるという心地よさである。もちろん、誰かが、自分の考えや思いを抑えることもあるかもしれない。しかし、その抑えた思い以上の「心地よさ」もある。

このようなアサーションの対話が成立するためには、明確になった課題に対しての取り組みを通した達成感を体験することである。生活科における「和みカリキュラム」は、体験活動を通して、成し遂げたという達成感を味わうことのできるプログラムによって成り立っている。したがってこの経験によって得られた成果を生活科はもちろん他の教科や領域に広げていくことが実践的な課題となる。

ともすれば、課題が明確でないために、子どもたちの考えが別々の方向にすすんでいくことが多く見られる。同じ方向を目指せない子どもたちは、意欲的に学習に取り組めず、消極的になり、自分の意見を通すことに力点が置かれ、課題に向かえない意見の言い合いが続くことになる。これは対話ではない。

「和みカリキュラム」の実践を通して、子どもたちが、興味・関心を持って真剣に取り組むようになる明確な課題があれば、同じ方向で対話が進んでいく。意見を覆されても「なるほど、そんな考え方もあるんだ。」と気づきの質の違いにおもしろさを感じ、対話が深まっていく。

「アサーション」があれば、課題に向かう対話が深まる。自分の意見を我慢して、友だちの意見ばかりを受け入れるのではなく、「お互いがいいな」と思える考えを導き出せる関係を感じ取ることができる。

また、自分の意見が通らないことがあっても、「それは課題に向かっているからであり、決して自分が否定されているわけではない。」という自己肯定感をもって、相手が認められる対話を進めることができる。

生活科は、他教科と密接に関連づけた単元構成を考えることができる。その中で、子どもの心をゆさぶるような体験活動を展開することができるのである。自己認識がようやく確立し、客観的なものの見方ができはじめる2年生だからこそ「アサーションの対話」を

〈資料2〉2009年度 2年C組居澤学級 生活科年間カリキュラム

第2学C組 生活科年間カリキュラム『自立をめざして』

《目標》具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心もち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
2学年 生活科 105時間	めざせ！2Cみんなが、2C一人ひとりが〇〇博士！											
	あれ？どうして？調べて、深めて そうか！もっと知りたい！ 広めたい！											
	はる をばらそう、楽しもう！ ・おくやま、和歌山城を散策、探検 草、木、花、虫、人など ・なぜかいつぱい！ ・春の草花をいけよう。											
他教科・領域との関連	なつ をばらそう、楽しもう！ ・おくやま、和歌山城で どんな博士になろう (調べて、聞いて、深めよう) ・“和み”でも大発見！ ・夏の草花をいけよう。											
	あき をばらそう、楽しもう！ ・季節で変わる発見がふえていく！ ・こうようを見に行こう。 ・いろいろな人にお話を聞く(聞き取り学習など) (いけ花、茶道、和歌山城の方、地域の博士など) ・秋の草花をいけよう											
	ふゆ をばらそう、楽しもう！ ・建物体験しよう ・発見したことが、いろいろなことに つながっていくよ。(調べ学習など) ・お正月のお花を生けよう ・冬の草花をいけよう											
他教科・領域との関連	はる は、もうすぐ！ 博士いつぱい、楽しもう！ ・自分たちの本をつくらう。 ・春の草花をいけよう。 ・一年間を比べてみよう。 (調べたことを振り返って) ・野菜を料理してみよう！											
	季節の野菜を育てよう！ 野菜もあれ？どうして？がいつぱい！											
	“和み”大作戦1 ・あいさつ、和食のマナーを身につける。 ・和食の調理、季節を感じる。・ふろしきの使い方。											
他教科・領域との関連	“和み”大作戦2 ・お花かざりを作る ・和室での立ち振る舞い、お茶の立て方パワーアップ											
	“和み”大作戦3 ・和食のマナー・お茶会をひらこう・季節のお花飾											
	ぼくわたし みんな 大すき！～大切なぼくわたし～ ・生まれる前、生まれたときの様子を聞く ・今までの様子(聞き取り調べ)・ありがたの手紙をかこう											
他教科・領域との関連	内容 〇自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行い、身近な人々とかわるの楽しさが分り、進んで交流することができるようにする。 〇さまざまな活動で自分の興味・関心を持ったことを、調べ学習や体験を通して、さらに深めることができる。(〇〇博士をめざそう！) 〇身近な自然を観察したり、季節や地域にかかわる活動を通して、四季の変化や季節によって生活の様子が変わることへ気づき、自分たちの生活を工夫したり、楽しんだりできるようにする。											
	《国語科》 書くことで表現しよう 季節の俳句短冊・色紙づくり・作文											
	《図工科》 竹とうやに作品をだそう！											
他教科・領域との関連	《図工科》 クリスマスリースを作ろう											
	《図工科》 花器づくり(竹)											
	《算数科》 野菜の長さってどのくらい？											

重視しなければならないのである。³⁾

3. 1. 4. ボランティア「和みたい」の活動

～保護者の参画によるカリキュラムの充実を図るボランティア活動の組織化と教育力の向上～

〈資料1〉および〈資料2〉のように、2009年度の学習内容は2008年度の総括の上に改訂を行ったものである。学習内容が充実してきたのは、和みボランティアの「和みたい」の寄与によるところが大きい。特に、子どもたちがまだ学校生活になれていない1年生の1学期では、活動を多くの目によって見守ることができている。これは、各時間のプログラムに基づく指導案のスタンダードが示されその理解の上に保護者の参画を実施しているからである。

特に、「お茶」の活動の時に扱う「湯」は、6グループもある中で、ティームティチングの二人の教員では授業展開をスムーズに行うことができない中、「和みたい」の参画によって一人ひとりが満足できる活動が行えたのは、大きな成果であった。さらに、全校的には、時間割作成の工夫をして、火曜日に1、2年生の生活科の時間を集中して位置づけ、連続した時間を有効に活用し、準備や後かたづけなど子どもたちや担任教師の活動を支える活動を「和みたい」が担当しているからできるのも特筆すべき特色である。

このような活動は、子どもたちの励みになり、2週間に一度、「和みたい」のメンバーとの出会い活動を共にすることは、ボランティアのメンバーにとっては、子どもたちの成長を感じる機会になっている。また、子どもにとっては、声をかけられることによって、子どもの意欲が一層引き出され、興味や関心の高まりの面で効果的であったといえる。こうした取り組みこそ、

子どもたちの自信やコミュニケーション能力育成に大きな手だてとなっている。

3. 1. 5. T.Tやボランティアによる共同の体験活動の推進

「和みカリキュラム」の具体的展開での特徴は、T.Tによる体験活動の推進と、ボランティア活動(「和みたい」)による多様な人との関わりである。子どもの活動の中心になっている「茶道」や「華道」の心得を取り入れた活動は、保護者やT.Tなどの知識や技能を生かし、それぞれの教育力を学校での活動に生かすことのできる分野であり、担任だけではできない「場の広がり」と「内容の広がり」を生みだすきっかけになっている。学びの質を高め、子どもの豊かな体験を保障する具体的な取り組みである。

少人数教育の中での指導者は、子どもの学習活動をとらえ、評価をきめ細かく行うことによって、一人ひとりの子どもの活動に生かすことができることが求められている。この基本原則は人数の多少に関わらないが、実際にできることには限界があり現在取り組みを進めている30人の学級サイズにおいては効果を上げつつある。図工や書写などの作品による表現活動を取り上げた場合、きめ細かなそして丁寧な指導の効果は指導教員に実感されている。

また、学校外のさまざまな人との関わり的重要性が強調されている中で、学校のカリキュラムとの調整を具体的活動内容と目標や指導内容レベルで図ることが大切であるが、学級担任以外でこうした調整に参画できる指導者を位置づけておくことが重要である。「和みカリキュラム」においては、中心となる指導者をT.Tとして配置し担任とボランティアとの間に入りながらカリキュラム運営にあたっている。

3. 2. 少人数学級の効果

3. 2. 1. 複式16人学級と30人学級

附属小学校には複式学級が3学級ある。各学年が8人の学年の一つ違う異年齢の学級集団である。1・2年生で編成された「1・2F」、3・4年生の「3・4F」、そして、5・6年の編成による「5・6F」の3学級を設置している。したがって各学級は、16名で一つの集団が編成されているのである。単式の少人数学級との違いは、異年齢であるということで、学習内容も学級において異なる。

異年齢複式16人学級の特徴は、教科学習の基本が8名という学年集団で展開される。したがって、一人の教師が直接関わる時間的な制約から、子どもの司会・進行による自主的な学習方法や学習規律が考え出され、子ども自身が獲得することによって教育効果を上げている。こうした異年齢や自主的な学習方法という視点からの30人学級の検討が必要になっている。

3. 2. 2. 子どもの思いや願い、考えを中心にすえたプロジェクト学習への発展

30人学級に対応した「和みカリキュラム」は、改訂2009年版の実施で2年が経過した。基本的なカリキュラムを、子どもの意欲や関心に沿ってどのように生かし、それぞれの時間を進めるかという課題は、各指導時間の目標、内容、活動が明示されているからこそ、広げたり、重点化して深めたり、また、他の活動とつないだりすることができている。子どもの興味や関心を大切に、基本的なことを押さえながら、発展的に学習することが強調される生活科において、プロジェクト学習として学習する方向性を常に持ちながら学習が展開されている。

3. 2. 3. 体験のきめ細かなみとりと支援の30人学級

30人学級においては、一人ひとりの活動における出番が準備されており、体験活動の充実となってあらわれている。本校における校庭や敷地に生えた多くの樹木や草花は、それぞれの季節を「生ける」格好の素材を提供してくれる。生け花にする素材としての草花を探すことから季節を体感し、感性を豊かにする活動につながっていく。一人ひとりが準備してきた、身近にあるコップやカップに季節の野草を飾ることによって相手の心、見る人への思いを想起することができた。また、秋にはこの思いを言語活動と結びつけて表現し、短冊と共に、生け花が飾られる取り組みへと発展した。子どもの思いの表現から伝え合いへと発展的な学習が図られた。

お茶に関わる活動を通して、基本的な行動・マナーを学び体験することによって、自分の行動や考えを振り返る機会が作られ、適度な緊張感と共に、人を「もてなす」ことについて、相手の立場に立って思いをめぐらすことができた。特に活発に毎日動き回り、活動的な子どもにとっては、和歌山城内での「お茶室」体験や学校での教職員を招待する「お茶会」においては、

おもてなしの心をどのように表現するかという日常を超えた体験としての意義付けができる機会となった。この体験が、家庭でのお茶に関わった生活体験と結びつくことによって、子どもの体験活動の幅を広げることができた。

身のまわりの小さなものに目を向け、自分で表現することを通して豊かさを実感させることで、図工科との関連を図りながら、「ものづくり」を通して推進することができた。

ともすれば消費するだけの生活にどっぷりつかっている子どもたちにとって、つくりだして利用するという発想は、生活の中では少なくなっている。「はしぶくろ」をつくる活動を通して、身近な生活の事象を見直し、自分から積極的に対象に働きかける姿勢は、自立へとつながる基本的なものである。

活動は会話を生み、人とひとの関係を深くするきっかけをつくる。具体的には、学校での活動やその成果としての作品は、家庭に持ち帰えられ、家庭での話題をつくり、相互のコミュニケーションを生む。そして、次の体験へとつながっていく。このような取り組みとその広がりを通して、子どもはそれぞれの集団での居場所を確保し、精神的な安定を生むのである。自己肯定感を育みながら出番を待っている。

おわりに

2009年度末実施した「少人数（30人）学級に関するアンケート」によれば、附属小学校で30人学級と40人学級を経験したベテラン教員は、30人学級のよさと問題点について2カ年の学校全体に関わる取り組みをふまえたように3点にわたって、その教育効果について回答している。⁴⁾

①30人という少人数が生きる場と教育効果

指導者側からの利点は、子どもの学びに対する細かいみとりが成立する。また、個別支援が必要な子に対してリアルタイムで支援を行えることである。また、子どもの同士のまなざしの共有も同様である。子どもが互いの良さや課題・活動を知る、伝え合う、取り入れる、相互評価するといった子ども同士のかかわりが濃密になり、子ども同士の支援、協同的な学びがより成立するようになった。

その点においては、少人数になったことで一人ひとりの出番・活躍の場が、これまで以上に保証されるようになったことが大きな要因である。そんな中、一人ひとりが自分の居場所をしっかりと認識し、自信を深めながら表現力を伸ばしている。

学びの質を高めるため、学習展開の中にペアやグループによる学びの場を設ける機会も多い。2人・15ペア、3人・10グループ、5人・6グループ、6人・5グループ、15人・2グループなど、目的や活動内容によってバリエーション豊かに取り入れることができた。30人という学級編成は、子ども同士の学びの共有・

共感、学びの空間が程よい単位であるといえよう。

②学級サイズに対応した指導方法・カリキュラムの開発と効果（プログラムからプロジェクトへ）

同じ指導案で、基本となるプログラムであっても、細かいところまでみとりと支援が可能であるため、子どもの思い・願い・考え、また学級の実態・ニーズに合わせて活動をひろげたり・ふかめたり・つなげたり、プロジェクト的に学習を展開できた。

もちろん逆に、つけたい基礎的な力が同じであるならば、子どもの実態が多少違って、個別の支援が充実できるため、プログラムとして授業実践が可能となる場合もある。

③幅広い学習対象に向かう実体験の充実

出番・活躍の場が保証される中には、一人ひとりが実際に体験する機会の充実も含まれる。

緑豊かな、文化施設に包まれた本校の特筆すべき環境を生かしながら、新学指導要領でも重要視される我が国の伝統文化にもリンクしたカリキュラムを開発し、実感を伴った学びを実現することができた。

しかし、他方では、40人学級における問題点を指摘しながらではあるが、30人学級に比して40人学級のよさを次のように指摘する教員もいる。

「児童の人数が多いほど多様な意見がでるのは当然である。授業においてはより多くの発想力・論理力等

に包まれ、授業は成立しやすい。また、多くの仲間の中から、自分に合う友達を見つけることができる。」

こうした現状をふまえ、今回は、「和みカリキュラム」を中心に検討してきたが、「本校の『和みカリキュラム』は、30人学級の利点を十分生かしたカリキュラムであり、今後もさらに価値ある実体験を充実できるよう学校として取り組んでいきたい。ただ、30人とはいえ、豊かで確かな体験活動を一人ひとりに保障するためには、例えば担任単独での指導では十分な支援ができるとは限らない。今後も、意識の高い保護者の教育力を有効に活用することで、幅広く質の高いカリキュラム開発が可能になると感じる。」という意見に代表されるように「和みカリキュラム」の実践を通して明らかになった成果を他のカリキュラム開発に生かし、その教育効果を検証していく必要がある。

注記

- 1) 松浦善満、梅本優子、西村充司「少人数教育の『教育効果』とカリキュラム開発に関する研究(1)」和歌山大学附属教育実践総合センター紀要19号2009年
- 2) 居澤結美「アサーションの対話をめざして～子どもたちから生まれた課題～」和歌山大学教育学部附属小学校紀要第33集2010年3月
- 3) 前掲書
- 4) 附属小学校教員少人数教育に関わるアンケート調査『附属小学校教員による少人数学級の現状把握～体験に基づく実践的・印象的把握～』2010年3月実施